



◆目次

アフリカレポート  
No.29 1999

巻頭言 ●宮本正興 1

特集 1 ケニア・タンザニアの今

新たな民族「アルガナ」の創造 ●曾我 亨 2  
——1997年ケニア国会選挙と  
牧畜民ガブラ

モンバサのムスリム女性組織 ●宇佐美久美子 7  
——その歴史と現状

市場経済と共生する  
ケニア牧畜民 ●湖中真哉 12

組織化・制度化する  
「インフォーマルセクター」 ●小林直明 16  
——タンザニア・ダルエスサラーム  
の場合

タンザニアの商業的バンド活動 ●鶴田 格 20  
——激変する政治経済状況の  
中での史的展開

特集 2 南アフリカ総選挙

南アフリカ共和国の  
第2回全人種参加総選挙 ●牧野久美子 24  
——焦点と結果

ムベキ新政権 ●平野克己 30  
——陣容と課題

グラゲ商人の生成と解体 ●西 真如 33  
——「民族分権国家」エチオピアで

調査員/レポート

新国家エリトリアの形成と現状 ●児玉由佳 37

資料紹介 43

アジア経済研究所 新刊紹介 47

カット：アフリカの街角（マダガスカル・アンタナナリボ）  
（吉田栄一撮影）

本誌に掲載されている論文などの内容や意見は、外部からの投稿を含め、執筆者個人に属し、  
日本貿易振興会あるいはアジア経済研究所の公式見解を示すものではありません。

- 今号から本誌表紙に新しい組織名称を掲載する。奥付も少々変更になった。次号では住所も変わる事になろう。落ち着きがなくはなはだ申しわけないが、編集方針に何らの変化はない。
- アジア経済研究所は、来る12月1日から、千葉幕張に移転する。省庁再編、国際協力銀行の新設、国立大学のエージェンシー化。私たちの回りにもさまざまな機構改革がひたひたと押し寄せている。
- ところで、南アフリカに対して日本はどのような援助を行なっていくべきかという課題を、ある場を与えられて考えている。現地にも赴いたが、ことはそう簡単ではないという感が強い。
- 南アフリカは1994年の革命的変化を経て、かつて反アパルトヘイト闘争を支えてきた広範な勢力が、大きくは官と民に分かれた。その棲み分けは民主南アフリカに独特の社会編成をもたらしている。開発の分野はその典型で、政府はそれを、自分たちが率先して果たすべき任務とは考えていない節がある。反アパルトヘイト闘争の遺産として南アフリカには巨大な公益セクターが存在するが、社会開発は彼らの専門分野だとす

る諒解が官民に共有されているように思えるのである。政府は経済成長政策の策定と遂行に専心しており、通常想定されるような開発計画を有していない。南アフリカ政府にはODAを扱う実質的な機構もない。

- したがって、他国におけるように中央政府を相手に開発プロジェクトやODAについて話し合おうとしても、なかなか功を奏さない。その種の協議は、開発現場に直結している公益セクターと行なった方がおそらくは効率的であり、南ア社会総体の編成のされ方が、ドナーにそれを求めているように思われた。そもそも、途上国社会ではどこにいても援助は歓迎されるという通念自体が、すでに綻んでいる。
- ODAを効果的に使うためには東京もまた変わらなければならない。多様な在り方に応じていける柔軟性が必要とされているのであって、無用な硬直がそれを妨げてはいしないか。機構を変えるのなら、そういった硬直こそを取り去らなければならない。
- 本誌の編集委員は以下の7名である。  
 平野克己、吉田栄一、望月克哉、高根務  
 武内進一、津田みわ、鳥谷尾克男  
 (平野記)